

地獄の季節

A SEASON IN HELL

ジャック・ヒギンズ

田口俊樹=訳



地獄の季節

ジャック・ヒギンズ
田口俊樹訳



Hayakawa Novels

A SEASON IN HELL

by Jack Higgins

Copyright © 1989

by Jack Higgins

First published 1991 in Japan

by Hayakawa Publishing, Inc.

This book is published in Japan

by arrangement with

Ed Victor Ltd.

through Tuttle-Mori Agency, Inc.,
Tokyo.

地獄の季節

1991年 1月20日 初版印刷

1991年 1月31日 初版発行

著 者 ジャック・ヒギンズ

訳 者 田 口 俊 樹

発行者 早 川 浩

発行所 株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町2-2

電話 東京(3252)3111(大代表)

振替 東京・6-47799

印刷所 株式会社享有堂印刷所

製本所 大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-15-207705-0 C0097

Printed and bound in Japan

地獄の季節

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1991 Hayakawa Publishing, Inc.

シャーリー・クーパーに

復讐は地獄の季節

——シリィの諺

1983

四時すぎ、ショーン・イーガンは穴の隅にうずくまっていた。できるだけ体の熱を逃さないように両手を腋の下にはさんで腕組みをしていた。もっとも、穴倉生活がすでに四日続いた今では、体の熱はもうあまり残っていなかったが。穴は四フィート四方の大ききで、たとえば彼が望んだとしても、体を横たえることはできなかった。ゴリラは、自らの排泄物の上に寝転がるのを意に介さない唯一の動物であるという記事を、彼は何かで読んだのを思い出した。まだそこまでは行っていなかった。悪臭にはとくに慣れていなかったけれど

も。

足は裸足だった。が、迷彩色の落下傘降下服を脱がされるのは免れていた。頭にはカーキ・グリーンのスウェット・バンド。それを彼は砂漠スタイルでターバンのように巻いていた。顔はやつれて青白く、高い頬骨のあたりの皮膚がぴんと張って見えた。チャイナ・ブルーの眼にはなんの表情もなかった。十二フィート頭上の竹の小割板の隙間から、雨が降り注ぎ、時折壁面の土が崩れて、すでに三、四インチの深さに達している底の水溜まりに落ちた。

そんな中に彼はじっとうずくまっていた。やがて雨音に混じって、誰かの足音と調子はずれの口笛が聞こえてきた。その足音と口笛の主もイーガンと同じような、しかし模様が少し異なる迷彩服を着ていた。それはアフガンに駐留しているソ連軍が編み出した、いわばアフガン模様の迷彩服だった。

襟章を見るかぎり、その男は曹長のように、帽子にはソ連軍の赤い星と、第八十一突撃空挺連隊の紋章がついていた。

バッジと紋章を見れば、イーガンにはその男の階級と所属がわかった。それが彼の仕事だった。彼は無言で頭上を見上げた。曹長は片手にAK突撃銃を、もう一方の手によ

り糸のぶらさがった金属製の容器を持っていた。

「まだいたのか？」と曹長はAK突撃銃を脇に置くと、嬉しそうに英語で話しかけてきた。「そんなところにいたんじゃない体が濡れちまうだろうが、ええ？」イーガンは何も答えない。身じろぎひとつしなかった。「まだしゃべる気はないのか？ まあ、せいぜい頑張るんだな、戦友。どうせ最後にはしゃべるんだから。みんなそうさ」曹長は竹の小割板の隙間から容器を差し入れた。「朝飯だ。今朝はコーヒーだけだ。おまえに栄養をつけさせる義理はないからな」

イーガンは容器を受け取り、蓋を開けた。確かにそれはコーヒーだった。意外にもまだ熱く、蓋を取ると、湯気が湿った空気の中に広がった。しかし彼は吐き気を覚えた——臭いを嗅いだけで胸がむかつくようなものなど、とても飲めるものではなかった。それを見越した上での差し入れだった。

曹長が笑って言った。「でも、おまえさんたちは紅茶しか飲まないんだったよな。残念なことに」曹長はズボンのボタンをはずし、穴の中に小便をし始めた。「これならどうだ？」

穴に逃げ場はなかった。イーガンは隅にじっと坐って無

言で頭上を見上げ続けた。

曹長はAK突撃銃を取り上げて言った。「五分したらまた来る。それまでにちゃんとコーヒーを飲んでけよな、いい子だから。またお仕置きされないように」

そう言って曹長は歩き去った。イーガンの顔つきが変わった。足音が聞こえなくなるのを待って彼は立ち上がった。五分。与えられたチャンスはそれだけだ。彼はカーキ・グリーンのスウェットバンドを頭からはずした。それは一見なんの変哲もないスウェットバンドだった。が、見えない部分の糸がほぐされ、また丹念に編み直されていて、伸ばすと長くて丈夫な一本のひもになった。

彼はすばやくそれを腋の下で結び、ループをつくって首に巻き、もう一方の端を口にくわえた。そして穴の壁面に背中を押しつけ、反対側の壁面に足を伸ばして踏んばり、竹の小割板に手が届くまで尺取虫のように穴をのぼった。そうして口からひもの端を放して二枚の小割板にひもを通し、小割板の強度を確かめた。

雨の音以外何も聞こえなかったが、彼はさっきの曹長がまた舞い戻ってくる気配を感じ、数秒待って機をうかがった。そして踏んばっていた足の力をゆるめてひもにぶら下がった。と同時に叫び声をあげた。

頭上の小割板がたわみ、ばねにぶら下がったように彼の体は宙で弾んだ。彼は首を一方に傾げ、薄眼を開けて首にひもが巻かれているのと、腋の下に通したひもが体重を支えてくれているのを確かめた。

うろたえた曹長の叫び声が聞こえた。曹長はひざまずいてブーツから戦闘ナイフを抜くと、小割板の隙間に手を入れてひもを切った。イーガンの体は一度壁面にぶつかってから汚物と汚水の中に落ちた。彼はじっと待った。小割板が取りはずされ、竹の梯子が穴の中に降ろされた。

曹長はあわてて梯子を降りてくると屈み込んだ。「この馬鹿たれが！」そう言って彼はイーガンを抱え起こした。

イーガンの両の拳が飛んだ。完璧なフェニックス・フィストが——指の第二関節を突き出して握られた拳が曹長の両耳の下をとらえ、首に突き刺さった。曹長には声をあげろ暇もなかった。かすかなうめき声を洩らして白眼をむき、意識を失った。

イーガンは曹長のブーツをすばやく脱がせて履いた。さらに赤い星のついた迷彩色の帽子を目深にかぶり、注意深く梯子をのぼった。

地上に人影はなかった。森の向こうの空に煙がたなびいていた。その方角に彼が訊問を受けた小屋があった。が、

その森を抜けると四分の一マイルばかり先に川があり、その川を渡ることができさえすれば、危険からは逃れられた。そこから向こうは山までなんの障害もないはずだった。彼はAK突撃銃を拾い上げると、頂上に雪をいただく山々を眺めてから、森に向かって走り始めた。

森にはいって五十ヤード足らずのところに仕掛け線が張ってあった。彼はそれを注意深くやり過ごした。仕掛け線はもう一本張ってあった。一本目と数フィートと離れていないところに。あまりに間隔が近すぎてまさかと思うようなところに。イーガンはその線も慎重にまたいで、雨に濡れそぼった、腰までの高さのワラビの茂みを突き進んだ。

そのとき、彼の右側の森の中で何かが炸裂した。敵を倒して逃げただけでは充分ではない、問題なのは逃げおせられるかどうかだ、という陸軍特殊部隊の格言が一瞬彼の頭にひらめいた。もちろんそれは地雷ではなかった。もし地雷だったら、彼の体は粉微塵になっていたことだろう。どうやらそれは地上すれすれに放たれた電子光線によって作動した、非常警戒装置のようだった。それを裏づけるように、彼が訊問を受けた小屋の方角から、木々を通して警報が鳴り響くのが聞こえた。

彼はAK突撃銃を胸のまえで握りしめ、さらにワラビの

茂みを突き進んだ。

左手に何かが動く気配を感じたと思った途端、頭を低くした迷彩服姿の兵士が、茂みの中からいきなり眼のまえに現われた。イーガンはすばやく身をかわすと、片膝を曲げてもう一方の足を兵士のまえに突き出した。兵士は彼の足につまずいて倒れた。イーガンは兵士の側頭部を思いきり蹴飛ばした。そして走った。

左の膝が痛んだ。が、その痛みは感覚をとぎすましてもくれた。やがて下り斜面が急になり、彼の足に勢いがついた。そのあたりはワラビのジャングルのようだった。エアポケットのような、ジャングルの小さな切れめに出了たところで、反対側の森から出てきた三人の兵士と出くわした。

が、イーガンは足を止めなかった。一瞬の躊躇もなくAK突撃銃をぶつ放し、ひとりの顔に銃床を叩き込み、もうひとりを肩で突き飛ばして走り抜けた。

まえのめりになり、危うくバランスを崩しかけたが、なんとか体勢を整えた。そのときヘリコプターの音がすぐ近くで聞こえた。が、天候が彼に味方してくれていた。ヘリコプターはそれほど低いところまでは降りてこなかった。木々の合い間に、霧と雨に煙る川が見えた。

息が切れ、胸がしめつけられた。左膝が熱く焼けついた

ように痛んだ。が、彼は走り続けた。川に達する最後の急斜面をすべるように駆け降りた。降りて体勢を整えた。その途端、背中に激痛が走った。それまでワラビの茂みに身を潜めていた兵士が飛び出してきて、彼の腎臓にライフルの銃床を叩き込んだのだ。

彼は苦痛に身をのけぞらせた。間髪を入れず、ライフルが彼の咽喉をしめつけた。彼はAK突撃銃を放し、うしろの兵士の向こう脛を右足の踵で蹴った。叫び声がし、咽喉にかかる力が一瞬弱まった。その隙を突いて彼は兵士の顔に頭突きを浴びせ、左の肘をすばやく、しかし力一杯兵士の脇腹に叩き込んだ。

そして振り向いた。が、彼の左の膝はもう限界に達していた。彼はよろめき、膝をついた。そこへ鼻血で顔を真っ赤にした兵士の膝蹴りが飛んできた。イーガンはそれを顔面に受け、仰向けに倒れた。兵士は彼を踏みつけようと片足をあげた。彼はその足を両手でつかんだ。そしてねじり、一方に放り投げた。兵士はもんどり打って倒れた。イーガンは兵士に立ち上がる隙を与えず、いいほうの右膝をつき、兵士の脇腹に痛烈なパンチを送り込んだ。兵士はうめき声をあげて動かなくなった。

ヘリコプターの音がさっきよりも近くなった。人の声と

犬の鳴き声も。イーガンはAK突撃銃を拾い上げ、川べりまで片足を引きずりながら歩いた。川の上は霧が濃くて向こう岸までは見通せなかった。雨で水かさの増した川は茶色の濁流に変わり、ところどころ泡が立っていた。流れは速すぎた。たとえどんなに泳ぎがうまかろうと、対岸まで泳ぎきるのは不可能だった。それに水温も低すぎた。とても長い時間水につかっではいられない。

彼は、流木の枝がやぶに引っかかっているところまで川べりを歩いた。ほかに生き残るチャンスはなかった。彼は川の中に飛び込んだ。人の声はもう間近に迫っていた。彼は流木を揺すった。すぐにははずれなかったが、いったん枝とやぶのからまりが解けると、流木は一気に川の流れに乗った。彼はAK突撃銃を捨てて、流木の枝をつかんだ。人の声と犬の鳴き声に加えて、川べりのほうから一斉射撃の音がした。が、そのときには彼はもう霧と雨のカーテンにさえぎられて、川の中央まで来ていた。

川の水はおそろしく冷たかった。彼が今までに経験したどんな冷たさより冷たかった。すぐに感覚が麻痺した。膝の痛みも感じなくなった。彼は霧の繭に包まれ、やがてゆるやかになった川の流れに身を任せた。ヘリコプターが何度か頭上を行き過ぎたが、気になければならないほど

低いところまでは降りてこず、そのうちどこかへ飛び去って行った。

あたりにはなんの物音も聞こえなかった。川の流れと雨の音のほかは。酸のように骨に食い込む冷たさに逆らいたくはなかったが、彼は足で水を蹴って、流木につかまったまま向こう岸をめざした。

それは気の遠くなるような作業だった。が、彼は水をかき続けた。やがて彼のあらい息づかいに混じって、何か別な物音が聞こえてきた。うしろのほうからくぐもった低い音が聞こえてきた。彼は肩越しにうしろを振り返った。霧の中からいきなりモーターボートが現われ、舳先を流木の枝にぶつけて停まった。

六人ほどの兵士が乗っていた。その中のひとり、士官が立ち上がり、舟べり越しにイーガンを見下ろしていた。その士官の歳は三十代前半、中佐としては若いほうで、背は中ぐらい、鋭い眼に、あまり軍人らしくない長い髪、色は眼も髪も黒だった。鼻には今までに何度か折られた痕があった。迷彩色の落下傘降下服を着て、ベージュ色のベレー帽をかぶっていた。そのベレー帽には、ブルーの地に銀の翼と「勇者が勝つ」というSASのモットーが描かれて赤く縁取りされた、SASの士官用帽章がついていた。彼は

水の中にその逞しい腕を突っ込み、イーガンを抱え上げた。「ヴィリアーズ中佐」とイーガンはなんとか口を開いて言った。「こんなところでお目にかかるとはね」

「私がきみの審査官なのさ、シヨーン」とヴィリアーズは答えた。

「どうやら自分は落第みたいですね」とイーガンは言った。ヴィリアーズは人好きのする笑みを浮かべて言った。

「いや、きみは非常によくやったと思うよ。とにかく早いところここを引き上げよう」

SAS第二十二連隊は、全員が志願兵で構成される、おそらく世界で一番のエリート集団だろう。その選抜方法は厳格をきわめ、入隊を許可される者が十人にひとりということも珍しくない。中でも最終審査は、八十ポンドの装備をつけ、イギリスで最も荒れた地形のひとつ、ウェールズのブレコン・ピーコン国立公園内を、二十時間で四十五マイル踏破するという苛酷なものだ。その審査では今までに何人か死者が出ている。

トニー・ヴィリアーズは、小屋の窓辺に立ち、木々の向こうのワイ川（東ウェールズと西イン）に降りしきる雨を眺めながら、もう少しで命を落としかねないところまで行き、

戻ってきた男——イーガンのことを考えていた。「まったくここにもうんざりだな、こんな天気ばかり続く」と

彼のうしろで机について坐っている若い士官が笑った。

机の上のネーム・プレートには「ダニエル・ウォーデン大尉」と書かれていた。彼はブレコンの試験コースの担当だった。彼もヴィリアーズとともに、SASと近衛歩兵第一連隊の士官を兼務していた。

ウォーデンが机の上のファイルを開いて言った。「イーガンに関する記録をコンピューターから引き出しましたけど、すごい記録ですね。理由は明記されてませんが、アイルランド紛争では陸軍章をもらってるんですね」

「ああ、知ってるよ」とヴィリアーズは言った。「私も一緒だったんだから。サウス・アームで諜報活動してたのさ」

「フォークランドでは功労章。しかし重傷を負って八か月間入院。彼の左膝にはプラスチックとステンレスか何かが埋め込まれてるんですね。フランス語、イタリア語、アイルランド語を話す。これはなかなかのものだ」

「父親がアイルランド人なのさ、もう亡くなったが」とヴィリアーズは言った。

「もうひとつ。彼はなかなか優秀なパブリック・スクール

を出てる。ダリッチ・カレッジとはね」

ヴィリアーズ同様、ウォーデンもイトンの出身だった。ヴィリアーズは言った。「そういういや味な言い方はやめろよ、ダニエル。ダリッチはいい学校だ。レイモンド・チャンドラーが出たのがそこだ」

「ほんとうに？ それは知らなかったな。チャンドラーはアメリカ人かと思ってました」

「そうだよ。だから？」ヴィリアーズは机のところまで歩き、陶器のポットから紅茶を注ぎ、窓辺の椅子に腰をおろした。「今から言うのはすべてグループ・フォアの情報だ。きみのコンピューターからは引き出せない情報だ。ショーン・イーガンというのは実に面白い男なのさ。まず彼にはちょっと珍しい伯父がいる。きみもたぶん名前ぐらいは聞いたことがあるだろう。ジャック・シェリーという名前ぐらいは」

ウォーデンは眉をひそめて言った。「ギャングの親分なの？」

「それは昔の話だ。古きよき悪しき時代には彼は、クレイ兄弟やリチャードスンなどと同じくらいの大物で、ロンドンのイースト・エンドじゃえらく人気があった。大衆のヒーローだった。ジャガーに乗ったロビン・フッドなどと言

われてた。賭博や用心棒稼業やナイト・クラブの経営で財を築き、麻薬や売春にはいっさい手を出さなかった。賢い男さ。クレイ兄弟のように結局終身刑をくらうようなヘマは決して犯さなかった。それで合法的にやっても同じくらい金儲けができるとわかると、商売替えをした。テレビ、コンピューター、ハイテク産業に進出したんだ。資産は少なくとも二千万ポンドは下らないだろう」

「イーガンは――」

「シェリーには妹がいてね。その妹がロンドン在住のパトリック・イーガンというアイルランド人と結婚したのさ。パトリックは元ボクサーで、結婚した当時テムズ川沿いでパブを経営していた。シェリーはその結婚には反対だった。彼自身は今まで一度も結婚したことのない男なのさ」ヴィリアーズは煙草に火をつけた。「しかし、まあ、忘れちゃならないのは、ワッピングの半分を所有するような億万長者だとしても、ジャック・シェリーはやはりジャック・シェリーだということだな。ロンドンじゅうのギャングにとつて、彼の名前は今でも昔と同じ意味を持っている。いずれにしろ子供のいないシェリーは、ショーンに夢を託した。ダリッチ・カレッジの学費も彼が出したんだ。ショーンは優秀な生徒で、奨学金を得てケンブリッジのトリニティ・

カレッジに進学することになった。倫理学を専攻するつもりだったらしい。ジャック・シェリーの甥が倫理学を学ぶとはね」

ウォーデンは今やすっかりヴィリアーズの話に引き込まれていた。「それで何があったんです？」

「一九七六年の春、パトリック・イーガンと彼の妻は、ポートタウンの親戚を訪ねる途中、アルスターを通った。が、そのとき不運にもあるトラックの横に車を停めてしまった」

「爆弾ですか？」

「そう、それかなりでかい爆弾だった。通りの半分がそれで吹っ飛ばされた。何人も出た死者の中にイーガン夫妻もはいっていた。その当時、ショーンは十七歳六カ月だったが、ケンブリッジに背を向けると、即座に落下傘部隊に入隊した。ジャック・シェリーは激怒した。が、彼にもショーンを止めることはできなかった」

「ショーンはシェリーのただひとりの血縁者なんですか？」

「いや、ショーンのほかに女がひとりいるはずだ。もう六十を越えた女だが、確かシェリーの従妹だったと思う。その女がショーンの父親のバブを今でも経営してるんだ」ヴ

イリアーズは眉根を寄せた。「そう、アイダと言ったわけ。アイダ伯母。あともうひとりイーガン夫妻の養女でサリーという女の子がいる。赤ん坊のときに両親と死に別れた孤児だ。しかし、ジャック・シェリーは、その女の子のことは家族とは見なししていない。シェリーというのはそういう男なのさ。その女の子はイーガン夫妻が死んでからは、アイダ伯母と一緒に暮らしてる」

「ヴィリアーズ中佐」とウォーデンは言った。「中佐と曹長という関係にしては、ずいぶんとお詳しいんですね」

「ショーン・イーガンと私は、アイルランドで諜報活動をもう十二回も一緒にやった仲なのさ。それだけ一緒にいれば、お互いあれこれ知るようになるものだよ」いかにもパトリック・スクール出身者らしいヴィリアーズの、音節をとこところ省いたことばづかいが、ベルファースト訛りに変わった。「フォールズ・ロードじゃ、ことあるたびにこっちの命を危うくしてくれるような相手とは仕事はできない。またこっちも始終「闇下」と呼んでくれとも思わない」

ウォーデンは椅子の背にもたれて言った。「いずれにしろ、イーガンは両親を殺したやつらに復讐するために入隊したんですね？」